



衣生活学習における指導要領改訂による学習者の意識比較と学習教材の提案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡村, 好美, 本田, 愛, 土屋, 貴代, 湯地, 敏史, Honda, Megumi, Tsuchiya, Takayo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5390

衣生活学習における指導要領改訂による学習者の 意識比較と学習教材の提案

岡村好美、本田愛*、土屋貴代**、湯地敏史

**Comparison of clothing life learner's consciousness by revision of
the course of study and suggestion of the teaching materials**

**Yoshimi OKAMURA, Megumi HONDA, Takayo TSUCHIYA
and Toshifumi YUJI**

1. 緒言

家庭科の学習は小学校では1945年に新教科として創設され以来、5-6年の男女を対象に実施されており、中学校では1993年、高等学校では1994年に履修領域に男女による差をもうけない科目として位置づけられて現在に至っている¹⁾。近年の学習指導要領は知・徳・体のバランスのとれた力を身につけて、「生きる力」をよりいっそう育むことを目指すとしており、小学校家庭科、中学校技術・家庭科は生活に最も密接に関連した教科と考えられる。家庭分野は家庭生活・食物・被服・住居・保育で構成されており、社会状況の変化等の関係から学習内容は随時見直しがなされ、現行の家庭科の学習項目は、小学校家庭科と中学校家庭分野で統一された。被服領域は「衣生活」として組み込まれ、快適な衣服を考えるとともに自立した衣生活を実践する能力の育成を目指して、消費のあり方や資源・環境に配慮したライフスタイルの確立も含有した学習として充実が求められている。このような指導の下に教育現場において衣生活学習の見直しが始まり、日本のきもの文化の観点からの衣生活学習を検討する試みや²⁾³⁾⁴⁾、世界の衣生活の知恵や人々の願いについて考えさせる教材の提案⁵⁾、1872年の「学制」によって設置されて以降継続されている製作⁶⁾の内容の見直しに関する報告⁷⁾⁸⁾など、広範囲に及ぶ研究が報告されている。しかし、指導要領の改訂は約10年ごとになされるために現在は次の改訂作業に入っている状況でありながら、現行の指導要領の改訂による衣生活学習における成果に言及した報告は極めて少ない。

これまでに著者らは衣生活学習の現状把握を目的として指導要領改訂前に宮崎市内の小学校・中学校・高等学校の児童生徒を対象にした関心度調査を実施し⁹⁾、衣生活学習の内容に対する児童生徒の意識は女子に比べて男子で低く、また、男女ともに学齢が高くなるにつれて低下する傾向を報告してきた。また、意識の低さは学習内容の難易と同意ではないことを衣服学習内容の理解度によって示しており¹⁰⁾、視覚的な判断が可能で、発展的内容を取り込んだ体験的学習教材を改善方法として提案してきた¹¹⁾¹²⁾。

* 熊本市立出水南小学校、**新富町立新田小中学校

本研究では、児童生徒を対象にして、前回と同様の衣生活学習内容への興味・関心度調査を実施することにより、指導要領改定による衣生活学習における影響を把握するとともに、検討が求められる学習区分を明確にして、対応可能な学習教材を検討した。

2. 調査および方法

2-1 アンケート調査対象および調査時期

本調査は宮崎市および周辺の小学校5年生131名（男子61名、女子70名）、6年生160名（男子79名、女子81名）、中学校2年生231名（男子127名、女子104名）、3年生202名（男子115名、女子87名）、高等学校337名（男子206名、女子131名）を対象として、2011年11月から2012年2月に実施した。2006年の調査では中学生は3年生だけを対象としたが、家庭科の学習意識には進学等の関与が考えられることを考慮して2年生についても調査した。なお中学校1年生では衣生活関連の学習を行っていないために、調査からは外した。高等学校での調査は、衣生活を学習する学年が普通科と職業科によって異なるために、生徒を1-3年としてまとめて示した。

2-2 アンケート調査内容

調査内容は2006年の調査と同様に衣生活領域の学習内容の34項目について、興味・関心の有無の2段階で回答を求めた。表中の文字は、学齢に応じて漢字ひらがなを適宜使用した。結果は、興味・関心ありを1点に得点化して集計し、平均値を求めて比較した。各項を調査時の質問等から分類したところ、「着方」：7項目、「材料」：8項目、「手入れ」：9項目、「製作」：10項目の4つに分類された。2006年調査では分類の項目数はそれぞれ8項目、8項目、10項目、8項目であったが、授業者の指導内容や方法との関連から整理し直して比較した。調査項目および分類を表1に示す。

2-3 衣生活学習の検討と提案

教材カタログを用いて内容を検討するとともに、アンケート調査で認められた課題解決に向けた教材・学習方法を提案する。

表1 アンケート項目

着方	1. 季節に合わせた着方
	3. 洋服と和服とのはたらきのちがいがい
	9. 活動に合わせた着方
	10. 洋服と和服の着る場のちがいがい
	20. 衣服の衛生的な着方
	30. 洋服と和服の形のちがいがい
	32. 自分に合う衣服の着方
材料	4. 衣服の素材
	6. 手縫みの方法
	11. 編み方
	16. 化学繊維の作り方
	19. 衣服の素材の特徴
	21. 布の織り方
	24. 織り・編み以外の布
26. ぬい糸の種類	
手入れ	5. 衣服の取扱い絵表示
	7. 手洗いの方法・効果
	12. 洗濯機洗いの方法・効果
	13. 汚れの種類
	14. 洗剤の種類・使い方
	18. 衣服の干し方
	23. 衣服のたたみ方
27. 上着のかんたんな手入れの仕方	
33. 衣服の片付け方	
製作	2. 手縫い糸とミシン糸のちがいがい
	8. なみぬい以外のぬい方
	15. ミシンの取扱い方
	17. 洋服と和服の作り方のちがいがい
	22. 布を使った物作り
	25. 布のはしの始末の仕方
	28. なみぬいの方法
	29. ほころびの直し方
	31. ぬい糸と針の関係
	34. ミシンでのぬい方

3. 結果および考察

3-1 衣生活領域の各区分における学齢および男女の比較

「着方」、「材料」、「手入れ」、「製作」の各区分における、調査年の学齢および男女の比較を、

図1に示す。2006年度の調査では男女ともに学齢が上がると「着方」、「材料」、「手入れ」、「製作」の各区分への興味・関心が低下する傾向が認められたが、2012年度調査においては「着方」と「手入れ」に関しては男女ともに小学校から高等学校まで変化しないか、あっても極めて小さく、また、興味・関心の変化は中学校の時期に生じることが認められた。「材料」、「製作」への興味・関心は2012年の調査結果でも減少傾向を示したが、2006年の調査結果より低下は小さいことが認められた。また、興味・関心の低下は2006年時と同様に小学校から始まることが示された。

学習開始年の興味関心は「着方」、「材料」、「手入れ」の区分においては2012年調査の女子で高く、2012年男子が低い傾向であった。「製作」では2012年調査の男女が2006年調査結果より低く、特に男子児童において低いことが示された。男子児童の「製作」への興味・関心は学齢によって上昇することはなく、高校生でも大きな変化は認められなかった。家庭科の学習が終了する高等学校生では4区分のすべてで、2012年調査結果は2006年の調査結果より高い値を示した。

3-2 衣生活学習内容における比較

衣生活学習内容における男子および女子児童生徒の興味・関心の結果を図2、図3に示す。図は、「着方」、「材料」、「手入れ」、「製作」の各区分の項目で、2006年度の調査結果を合わせて示す。男女ともに2006年の結果はほとんどの項目において学齢の上昇に伴って興味・関心の低下が認められるが、2012年の調査結果では学齢の影響として明瞭に判断することはできない状況で、女子の2012年の調査結果は男子の結果に比べて学齢の影響が認められるが、高等学校生より中学校3年生において興味・関心は低い状況であった。

「着方」に関する学習内容では男女ともに2012年の調査結果は2006年の結果より興味・関心が高く、特に「自分に合う衣服の着方」において意識が高いことが認められ、近年の児童生徒は自己表現の方法として衣服を捉える傾向が強いと考えられた。この傾向は中学男子において明瞭に認められたが高校生では低下していることから、制服が義務着けられる状況における私服への意識の高揚とともに、アンケートの調査時期と学習時期との関係が影響していると考え

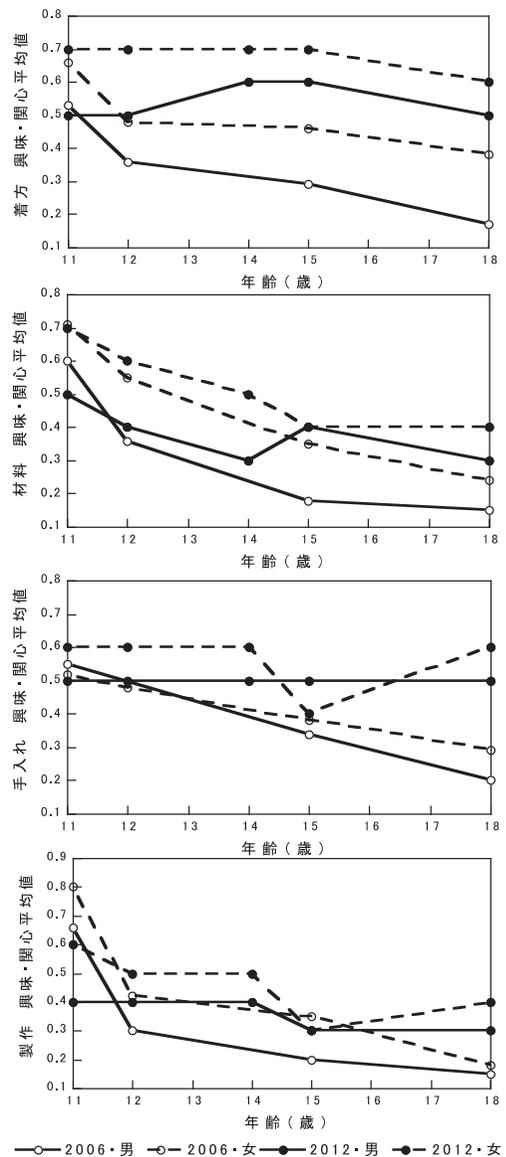


図1 衣生活学習各区分における児童生徒の意識

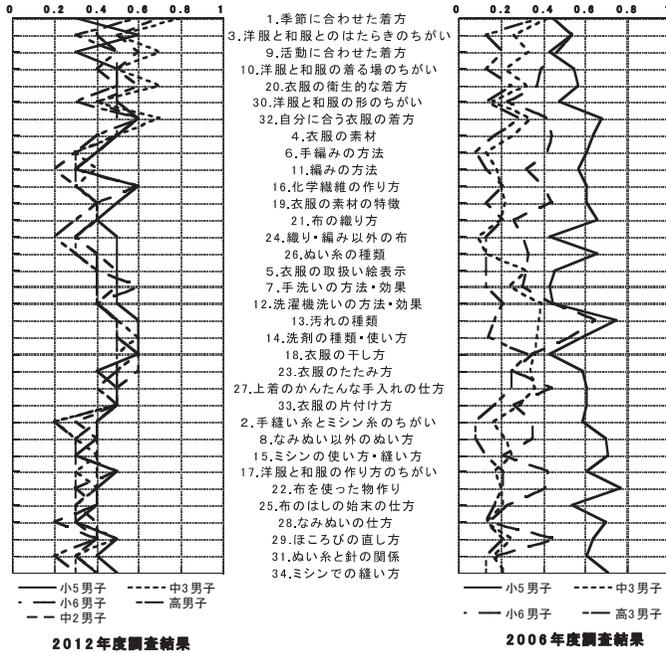


図2 衣生活学習内容に対する男子児童・生徒の意識比較

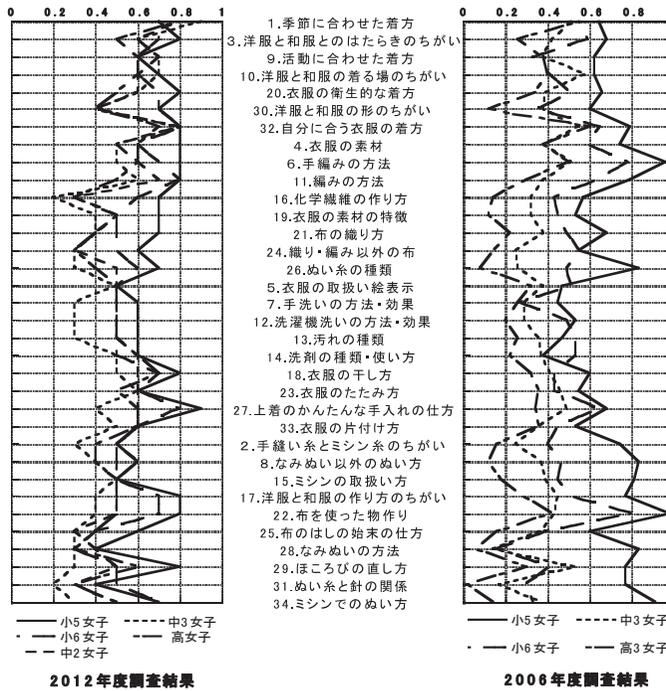


図3 衣生活学習内容に対する女子児童・生徒の意識比較

られた。

「製作」への興味・関心は男女ともに2012年の調査結果は2006年の結果より低下しており、自分で製作することを好まない傾向になってきたことが推察された。現行の指導要領の改訂に伴う衣生活の学習内容の変更は「製作」の区分において明瞭で、選択であった被服製作が、着装を前提とした製作に限定しない製作として必修化されたことである。小・中学校の指導要領は2008年3月に、高等学校の指導要領は2009年3月に改訂され、全面実施はそれぞれ3-4年後になるが、改訂に伴って授業の検討が始まったと考えられることは既に述べたとおりであり、2012年の調査における「製作」に関する興味・関心の低下は、学習に長時間を必要とする「製作」より、日常着に直結する「着方」学習の検討が進んでいることが関係していることを示唆しているとも考えられる。「製作」への意識の低下は製作経験が関係していることは既に報告している¹⁰⁾とおりであり、製作技術の低下について日景ら¹³⁾は、家庭科の授業時数の減少と日常生活における縫製経験の減少が影響していると報告している。家庭科における環境教育は、小学校では4Rとして扱われる¹⁴⁾が中学校では5Rが提唱されており¹⁵⁾、最後に加わったRの「repair」は「製作」領域の内容であることから、衣生活の面から環境教育を考えた場合には製作技術は欠かせないものであると思われる。また、「repair」は補修の意味であることを考えると、1998年の学習指導要領の改訂によって小学校の学習内容から削除された「ほころび直し」は中学校で扱う必要がある学習内容であると考えられる。

「手入れ」に区分される項目への意識は2012年の調査結果は男女ともに高いが、「材料」に関しては高学年になるに従って意識の低下が認められ、衣生活学習の中では「製作」に次いで意識が低いことが認められた。これらの学習内容は、2006年の調査結果でも学習開始時期から高学年になるに従って急激に意識が低下する学習内容であり、意識レベルとして2012年の調査結果は高いが、学習者の意識傾向には余り変化がないと考えられた。近年の衣服類は、ブランドやデザイン等の要素を外すと衣服素材の機能性を謳った製品が多く提供されているが、本調査結果による学習者の傾向からは、製品の機能を理解した着装はなされていないと推察される。この傾向は、保護者等においても同様であることは報告済みであり¹⁶⁾、小学校の学習内容における衣服の基本性能を理解するための「着方」と関連付けた学習の再考が必要であると思われる。

以上のようにアンケート結果の比較によって、近年の衣生活学習においては「製作」に関する意識や「手入れ」にもつながる製作技能の低下が認められるとともに、「着方」の基本である「材料」の機能は理解されていないと考えられた。自立した衣生活を遂行する能力の育成においては、限られた時間内であっても、目先の現象にとらわれずに基本的な知識や技術を修(習)得できる効果的な学習が必要であると考えられる。

3-3 衣生活学習の検討

衣生活学習の市販教材は、「製作」に関するモノが多く、次いで多い「材料」に関する教材の数を遙かにしのいでいることは2006年度にも報告した¹⁷⁾。2012年度発行の2社のカタログ調査の結果では、衣生活学習教材として確認された161種類の内訳は、「着方」：14件(8.5%)、「材料」：19件(11.6%)、「手入れ」：2件(1.4%)、「製作」：126件(78.5)で、「製作」教材の内容は、手縫い：42.5%、ミシン直線縫い：40.9%、ボタン付け：16.6%であった。また、これらの教材に使用されている布の種類は綿が19%で最も多く、次いでフリース：3.5%、ナイロン：3.0%、麻：0.8%となり、素材表示がない教材が63.5%を占めたことから、教材選びが衣生活学習に影響していることが推察された。

すなわち、衣生活学習の基本である衣服は主に繊維材料から作られており、「製作」に布は不可欠であることから、限られた授業時数の中での学習のためには知識と技能を同時に学べる内容であることが必要であり、繊維材料の選び方や使い方の工夫を入れることによって、「材料」と「製作」に関する内容を同時に理解・修得できる学習教材になると考えられる。

3-4 衣生活学習教材の提案

「製作」に必要な基本的技術はなみ縫いであるが、なみ縫いのしやすさは布の針通りの良さが関係する。そこで、市販教材布の針の貫通抵抗の大きさを参考にして、素材選びから始める「布を使った製作教材」を提案する。

3-4-1 針の貫通抵抗の測定

針の貫通試験方法は複数報告されている¹⁸⁾¹⁹⁾が、本研究では手軽に傾向が測定できる加藤等²⁰⁾の針通りの評価方法を改良して、身近にある料理用はかりを用いて測定を試みた。測定具を図4に示す。



図4 改良型針貫通抵抗測定具

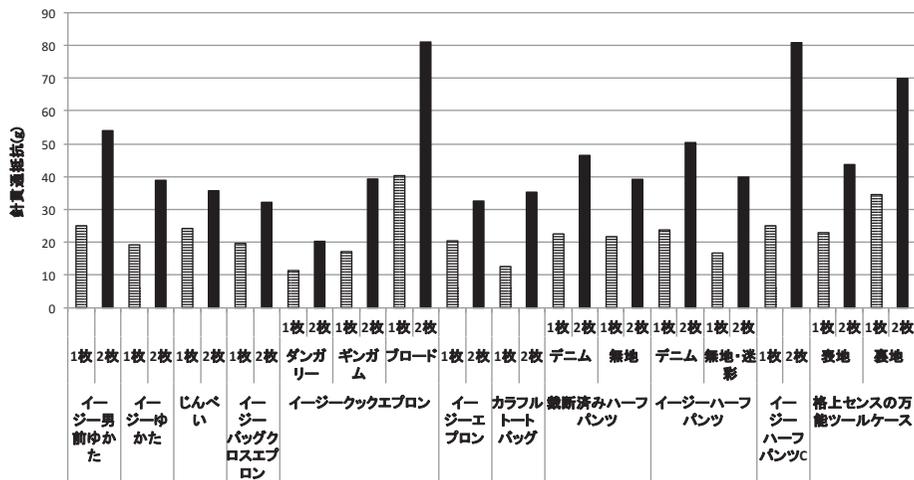


図5 市販教材布の針貫通抵抗

この方法によって綿用手縫い針による市販教材布の針貫通抵抗を図5に、実験用布の針貫通抵抗を図6に示す。これらの結果は使用布による針の貫通抵抗への影響を示しており、使用する布を考慮することで市販教材にはないものづくりが可能になると考えられた。

3-4-2 布の素材と構造を考えた「製作」教材の提案

表地には視覚的影響を考慮して羊毛布を、裏地には実用性を重視して薄地の綿布を用いて、4つ縫いによる袋作りを考案した。作品の一例を図7に示す。袋の底に縫い目を入れないことで、使用目的と布の使い方の関係が理解できる。また、和裁に用いられることが多い4つ縫

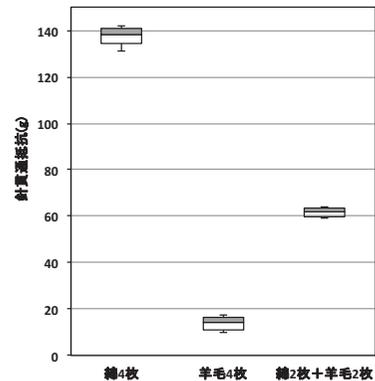


図6 実験用布の針貫通抵抗

い的手法を取り入れることで布の扱い方や、まち針の使い方や効果を実感できる他に、2箇所を縫うことで形作られる袋の構造が体験的に理解できる。また、四つ縫いのために縫い目は表に現れず、布端の始末も不要で、裁ち目の始末の必要性も理解できる。口の部分は小学校の学習内容であるかがり縫いで始末が可能で、表地に羊毛布を使用しているためにかがる時の針目を小さくすることで糸が目立たなくなる。これらのことから縫い目による仕上がりの不具合は生じにくく、他者の作品と比べることによって感じる挫折感は現れにくいと考えられる。口の部分にハトメの穴を4箇所開けて綿ロープを通せばできあがりであり、製作が早く進む場合には、袋に用いた布の残り布でひも作りを取り入れて持ち手とすることも可能である。



図7 作品例図

以上のように、提案した「製作」教材は、袋作りによって「製作」の基礎技術を習得するとともに、「材料」に関する基礎知識の修得も期待でき、ものづくりにおける達成感も体感できる学習になると考えられる。4枚の布のまち針留めや四つ縫いが困難な場合は、表地・裏地別々に袋を作り、裏面を合わせて重ねても同型の袋ができあがる。この点においても製作者の実態に合わせた学習教材として有効であると考えられる。

4. 結語

家庭科学習は生活に密接に関連した学習内容だが、社会状況の変化や学習状況による影響が大きいため敬遠されがちであり、この傾向は家庭科の衣生活学習において顕著である。指導要領の改訂によって衣生活学習内容が変更になったことに伴って様々な観点からの授業が提案されているが、環境教育や消費教育の観点からは課題が多い状況である。

本報告は、指導要領改訂前に実施したアンケートと同様の調査を実施し、両者の比較から衣生活学習者における課題を明らかにして、改善策と考えられる教材を提案した。その結果、以下の知見が認められた。

1. アンケート調査の比較によって認められた課題

- ①「材料」と「製作」に関する学習意識は2006年度と同様に他の学習領域より低い。
- ②衣生活学習における学習開始時期の学習意識は、2006年調査の結果より低く、「製作」において明瞭であった。

2. 学習教材の提案

- ①製作に不可欠な布について、既存方法を改良した簡便な方法で針の貫通抵抗を測定できることを示し、貫通抵抗の影響要因を考慮することで学習教材を提案できると考えられた。
- ②袋作りの方法として、四つ縫い又は2枚合わせて仕上げることを提案し、基礎縫いの技術とともに用具の扱い方を習得するとともに、布で作られたものの構造を理解する能力の育成に効果があると考えられた。

本研究に当たりアンケート調査お引き受け下さいました小・中・高等学校の先生方に、心より謝意を表します。

引用文献

- 1) 文科省ホームページ 国際教育協力懇談会事務局:国際教育協力懇談会資料集、3-2 資料16 (2014.7)
- 2) 村上山かおり、鈴木明子、一色玲子、藤井志保、林原慎:中学校「技術・課程」家庭科分野における甚兵衛製作を通して考える衣生活文化の題材開発、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、**39**、225-230 (2011)
- 3) 薩元弥生、川端博子、斉藤秀子、呑山委佐子、扇澤美千子、堀内かおる、井上裕光、葛川幸恵:浴衣の着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践、日本家庭科教育学会誌、**56**、14-22 (2013)
- 4) 川端博子、薩元弥生、斉藤秀子、呑山委佐子、扇澤美千子、堀内かおる、井上裕光:浴衣の着装を題材とする授業実践の試み、日本家庭科教育学会誌、**56**、78-89 (2013)
- 5) 柴静子、日浦美智代、一ノ瀬孝恵、高橋美与子、佐藤敦子、木下瑞穂、高田宏:針と糸の民「モン族」の暮らしと織物の教材化に関する研究、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、**38**、155-160(2010.3)
- 6) 猿田佳那子:衣生活関連領域における実験・実習教材の変遷と現状、同志社女子大学生生活科学、**47**、46-51 (2013)
- 7) 小林陽子、小谷敦子:小学校家庭科製作学習における学習指導法の検討-製作段取り票に着目した授業の試み-、日本家庭科教育学会誌、**53**、40-46 (2011)
- 8) 田中陽子:小学校裁縫科における裁縫と手芸の統合的扱い、日本家庭科教育学会誌、**54**、108-117 (1011)
- 9) 岡村好美、土屋貴代:生徒の関心度調査に基づいた被服学習の提案、宮崎大学教育文化学部教育実践センター紀要、**16**、25-33 (2008)
- 10) 岡村好美、平田昌代:「家庭科の被服」における学生の意識と理解に関する調査研究、宮崎大学教育文化学部紀要、**12**、1-6 (2005)
- 11) 岡村好美、中林健一、湯地敏史、清田祐一:「ビジュアル通気性測定」の提案、宮崎大学教育文化学部実践センター紀要、**19**、135-141 (2011)
- 12) 岡村好美:衣生活教育に着目した家庭科教育の現状、学部重点経費報告書、11-15 (2012)
- 13) 日景弥生、鳴海多恵子:被服製作に関する知識や技能の定着における高校家庭科男女必修の影響、日本家庭科教育学会誌、**54**、12-21 (1011)
- 14) 私たちの家庭科、開隆堂、(2011)
- 15) 中学校技術・家庭 家庭分野、開隆堂、(2012)
- 16) 岡村好美、中林健一、湯地敏史、日下部信幸:衣服素材の吸収昇温の簡便な測定方法、日本繊維製品消費科学会誌、**55**、467-471 (2014)
- 17) 岡村好美、平田雅代:「家庭科における被服」の現状に関する調査研究、宮崎大学教育文化学部紀要、**12**、7-14 (2005)
- 18) 板垣寛、藤原節子、松本章世:針貫通法による布の非破壊試験、神戸女子大学紀要、**22**、227-240 (1989)
- 19) 堀野恒雄:ミシン針の布貫通挙動の測定器、繊維機械学会誌、**31**、182-184 (1978)
- 20) 加藤登志子、井戸川倫也、稲荷田征:薄地素材に関する縫製条件の設定及びその検証、文化ファッション大学院大学紀要論文集ファッションビジネス研究 (2) (2012)